

くろつけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十五年一月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十九卷九号（通巻第二二五号）

鈴



くろつけ

新春号

俳句雑誌

GLOCKE

第225号

1. 2013

謹賀新年

緞帳の星

品川 鈴子

緞帳の星揺らめきて初歌劇

何もかも遣り掛けの儘年を越ゆ

元旦は独りせつせと片付ける

初湯に束子軽石欠かせざり



住吉の鳥居はすべて沖へ向く

浜千鳥民草なりし子ら早世

怒り上戸には訣れの濁り酒

怒りん坊泣きべそ持ち寄る亥の子餅

津波裂け岩の根々に万年青の実

近江美濃決戦の場は雪溜まり



# 玉

# 鈴

# 吟

兵庫 平田恵美子

敬老日メールの英語辞書に問ひ  
如來像の両手がサイン秋彼岸  
前世にもこの香に覚え金木犀  
繰り言につづく沈黙ちろろ鳴く  
バス渋滞秋夕焼の褪めるまで

愛媛 福島松子

爽籟や乳白色の女神像  
秋湿り不満噴き出す新内閣  
想ひただ一言のみに片割月  
名月や釣り好き静かに糸垂らす  
虫の音に結界作らる島の宿

愛媛 福田かよ子

雲海のはるかなる上天高し  
秋深し人波吸ひ込む競馬場  
秋高し道租神が笑む古民家  
白樺の株が腰掛け新蕎麦屋  
高き空猿に負けたる栗ひろい

兵庫 藤井久仁子

洋梨の脹れつ面にナイフ入れ  
霧雨に挑む鎖場石鎚山  
さ牡鹿の揺るる胸毛へ夕日影  
愛宕山を下るじぐざぐ柚子の里  
針持つ手止めて見る菊菊日和

兵庫 藤田かもめ

角伐りの格闘めきて固唾呑む  
身に入むや敦盛出づる野外能  
台風来お預け食らふハネムーン  
急峻の崖になだるる葛の花  
コスモスの学園都市へ白杖も

兵庫 史あかり

但馬牛の鼻紋とる子ら秋高し  
六地藏一体づつに小菊の香  
好きに猪目銘々選び新走り  
貼り紙は在釜と墨書文化祭  
目のうろこ落つ晩学の秋灯下

兵庫 古井公代

貸農園釣瓶落しにうろたへる  
露草は一日厠に役果す  
女の子小さめ選ぶふかし諸  
間引菜を水に放てば立ちあがり  
月見豆金次郎像はまぼろしに

大阪 古林田鶴子

台風の置き忘れしかごみ芥  
友呼ぶや朝色鳥のにぎやかに  
転倒し思わず眺む秋の空  
運動会アナウンサーは女子児童  
秋天をつらぬく声援地区マラソン

兵庫 細川知子

零余子摘み一番大き粒こぼす  
草ひばり時を急がぬ旅の丘  
橡の餅出雲訛りの好々爺  
稲架高く伯耆富士へと掛けるかに  
宿さがす秋の遍路の赤い靴

兵庫 細野恵久

数の子を噛めばこめかみ遊ぶなり  
寒空へ息吐き腹の空くごとし  
冬籠むかしは重きもの着たり  
山城の物見の跡や冬木立  
陰を出て真鴨の色となりけり

日光東照宮流鏝馬神事

愛媛 松井洋子

馬の目の涼し流鏝馬馬場に待ち  
流鏝馬や金地日の出の扇舞ふ  
流鏝馬終へ猛り止まらぬ祭馬  
笠取れば碧眼の武者秋祭  
馬誉めて流鏝馬を終ふ秋社

埼玉 松木清川

敬老会「おかめ」を舞ふは乙女なり  
豆腐屋も肉屋も閉ぢて夏果つる  
超音波破碎オペ台肌寒し  
朝日影我が身刈田に五十メートル  
秋草に埋れて立ちぬ忠雄碑

東京 松本アイ

朝どれのトマトはロッカーツーコイン  
寄席の客なべて銀色秋暑し  
朝やけに撞かるる鐘のゆるやかに  
三連覇のがすも爽やかプールの王者  
夏やせは誰のことかと試着室

愛媛 松本恒子

つるべ落しぼんやり灯る古本屋  
吉原に残る水茶屋白粉花  
老翁の逝きて菜園猫じやらし  
蔦紅葉小屋の破れ板飾りけり  
蓮根掘骨の音して闇まとふ

愛媛 三浦澄江

萩こぼす風のささやき無人駅  
梯より世情をなげく松手入  
台風過ぎ研ぎ澄まされし星一つ  
余生なほときめきもあり篝火草  
秋深し漢ばかりの職場バス

兵庫 三枝邦光

秋ふかし一山背負ふ磨崖仏  
被爆樹の振れにくわし新松子  
焼栗の爆ぜて民話の宿りかな  
声明の僧の一団野菊原  
流木を焚き上げ能登の浦祭

兵庫 水野範子

草相撲前進のみのカンガル  
小児科のテレビの台に木の実増え  
秋扇機械のごとく一斉に  
青天に稲穂かざして四万十川  
薄曇おもむろに出ず竜田姫

兵庫 水野弘

明けやらぬ鵲の高鳴さ里の山  
日雷小学校の声高し  
村祭赤禪の御輿はね  
古里や枯葉一枚音立てて  
稲架の下潜り登校笑い顔

香川 三橋早苗

邯鄲の迷ひ込みたる庵に住み  
兩岸は花野十石舟下る  
酒蔵を回り利酒鱒雲  
萩焼に吟醸一献吾亦紅  
帯少し短くなりて馬肥ゆる

茨城 三輪慶子

紫蘇の実をしごく白花まで抜く  
葉の陰に太りきつたる種茄子  
きつぱりと括れ瓢の揺るるなり  
蔓引きて己が力に転びけり  
魯田を吹きわたる風遠筑波

埼玉 向江醇子

朝まだき号砲一発運動会  
天地人九月の雨に生き返る  
手につきしはじかみの香嫌でなし  
老いてなほ燃ゆるものあり曼珠沙華  
かはたれの鉄路にそよぐ芒あり

兵庫 村田とくみ

此処も又ポストの失せて虫しぐれ  
臥す友を訪えば室津の赤とんぼ  
台風の物置犬も小屋もろとも  
時計草這へば美術のブロック塀  
車窓よりほんに黄なるはひまわり田

佐賀 森田 子月

ワイパーの踊るやや寒母運転  
病院へ通ふも母の手とともに  
時雨ては乳房の病ひ治りつつ  
日曜のお茶屋シャッター梅待つ絵  
×過ぎつインスタント俳句てふ時雨

大阪 師岡 洋子

弔電を打ちひたすらに栗をむく  
鳥渡りショーウインドーの中に人  
目が合ひし鹿に躓かれて困りをり  
客下ろす舟揺れてをり鳴の声  
雨兆す風の中なる鹿の耳

東京 安田とし子

朝寒や満たして陶の砂糖壺  
見えぬもの見えくる齡星流る  
湯の早の遠嶺うつくし木守柿  
かりがねや齡積むほど日に追はれ  
ことひとつ杞憂に過ぐる衣被ぎ

愛媛 梁瀬 照恵

貧血のわが血盗むは庭の蚊ぞ  
汝もまた血が欲しいのか秋の蚊よ  
黄色い声あげて園児等蝗追う  
明けてきし庭の木犀匂ふ頃  
工夫らの腑に沁み透るかき水

大阪 吉田 和子

冷房に喉つぶれたるバスガイド  
定年の夫弾くピアノ雲の峰  
炎昼の図書館ママの読み聞かせ  
老人の町に子の声盆帰省  
口上に負けて舞茸買ひ込めり

兵庫 明石 文子

秋夕やけ雀群れなし西の空  
あざやかや紫色の諸おこは  
独り居にオペの手順秋深む  
玄関番かまきり斧をふり上げる  
庭師より花柚子二つ貰ひ受く

愛媛 足利 鉦子

子の帰り待つ楽しみの秋祭り  
暁四時の狼煙が合図秋祭り  
蟹買って祭り気分の一人の餉  
誰れかれの病の噂秋の夜  
明け暮れて一人ぼっちの秋刀魚やく

兵庫 荒木 治代

柿を手に故郷の噂聞いてをり  
月照らす刃物の町をすり抜ける  
威勢よき八百屋先頭秋祭  
秋思濃し夫の弱音を聞いてより  
ひび割れし無名の墓や小鳥来る

# 鈴の奏

品川鈴子選

五十歩に満たぬ参道萩盛り 大阪 三浦喜久子

発掘の土戻されて龍の玉

長明庵覗きて秋の蚊にさされ

秋霖や金箔くすむ九体佛

新車来て猫も飛び出す秋日和 兵庫 的場うめ子

針に糸すーと通りて秋の夜

就活の孫の背中に赤とんぼ

台詞なき菊人形の濡場かな

秋場所の棧敷に座り声を挙げ 東京 樋口正輝

我が末路如何なるものか月に問う

コーラスを降りて仰ぐ秋の空

障子貼り思へど動かぬ我が手足

練塀のあらけずりなり秋日差 兵庫 福島悠紀

秋気満つ大樟下の遙拝所

ぴかぴかの祠のはり戸萩の声

ミン踏む音しづかなり月の窓

小一の子に釣られたる鱧に礼 愛媛 大西ユリ子

お神輿の供にと白衣届きけり

還暦の我が子神輿のお供就き

お神輿の渡船の合図狼煙音 山口 山本

米寿とて祝ひのおこは施設にて 山本 敏子

子等遠し施設ぐらしの米寿なる

端布いくつ継ぎて出品文化の日

うたがひつ食みしがうまし合せ柿

行商の先急ぎをり秋の暮れ 兵庫 荒木 稔

行平の名をとどむ町実むらさき

庭石に干さるる軍手秋暑し

ゲームセットどこより来たる赤とんぼ 安徳宮新酒一本献じられ 兵庫 仲田 眞輔

情熱といふ青みかん甘からず

糠床の指白かりし鱗雲

新蕎麦に辛口の酒小諸宿

ひといきに三十日のシュレッター 兵庫 稲山 忠利

茅の輪跨ぐ塾の帰りの尻かばん

雨止んでちんぼこほどの曼珠沙華

肩並び立つ立待のガスボンベ

# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 島内 美佳 //

\*選句は全て 品川鈴子

長明庵覗きて秋の蚊にさされ

三浦喜久子

障子貼り思へど動かぬ我が手足

樋口 正輝

鴨長明は鎌倉前期の歌人で下鴨神社の禰宜の家になつた。管弦や和歌の道に秀れていて和歌所寄人に補任したが、一〇〇四年には出家して大原山に隠れ、後に日野の外山に方丈の庵を結び「方丈記」「発心集」「無名抄」などの著作で知られる。その庵の辺りを吟行して、千年余り前でも文人の生様や詞には、どこか親しさを覚えて、きつく刺す秋の蚊さえ許した。

針に糸すーと通りて秋の夜

的場うめ子

手先が器用で若いころは暇さえあれば編み物や裁縫その他の手の芸にも熱中したものだ、寄る年波で五感の衰えを覚え、夜は針孔(めど)に糸が通りにくい。針仕事を昼間に仕上げて夜なべは減らし気味。和裁教師を定年で辞めても針と糸を両手に構え、手元を見ずに糸が通せる方もあり、体で覚えた経験は尊くて、羨ましい様な長寿振り。

障子の張り替えは、家庭の手仕事では大仕事のひとつ。居間など段々無精を決め込んで切貼りや継ぎ貼りで済ませてしまう。それも熟練の手助けが欲しい。高齢で手足も、思うようには動かぬ身をかこつかと、始めから臆しがち。

ミシン踏む音しづかなり月の窓

福島 悠紀

一日の家事を終え、縫い物に取り組んでいる。窓からは月が見える。ミシンの音が静かだということは熟練者だと思われる。夕食後のほっとしたひととき。

お神輿の渡船の合図狼煙音

大西ユリ子

狼煙とはのろしのこと。昔中国で煙をまつすぐに上げるため狼の糞を用いたことからこの字が使われている。秋祭りのお神輿が渡船に載せられ、のろしの音とともにゆった

りと発つ。まばゆい秋の空のもと。

端布いくつ継ぎて出品文化の日

山本 敏子

縫い物をするに端切れが次々と出来る。それは年々増えていく。その端布をいくつも繋ぎ合わせて作品にした。思いつきの布で作った作品は、文化祭で皆の目を楽しませたことだろう。

行商の先急ぎをり秋の暮れ

荒木 稔

行商は訪問した玄関先で家の人といろいろ雑談して商品売り込むが、日暮れの早い秋にはそうゆっくりして貰えない。行商人の慌てた様子が目に浮かぶ。

新蕎麦に辛口の酒小諸宿

仲田 眞輔

長野県小諸市は、雄大な浅間山の南斜面に広がり、中央部に千曲川が流れる歴史と文化のかおる高原都市。地元の新蕎麦に舌鼓をうち、地酒を酌む。これぞ旅の醍醐味。

ひといきに二百十日のシュレッダー

稲山 忠利

シュレッダーとは、紙を細かく切り刻む機械。最近では現金自動預け払い機の横でも見かける。台風のアマリの風の強さにシュレッダーと比喻したところが興味深い。

亜麻色の幕はる如く稲雀

堀口香代子

亜麻色とは黄みを帯びた薄い茶色のこと。髪の色の場合にもよく使われる。幕を張ったように見えるほど稲雀がいた。昨今、雀がいなくなつたと報道があるが、雀がいるのは、平和な光景。

ゆったりと黒髪まとめ夏芝居

小菅美代子

芝居を観に行くのに、髪をまとめた。それに合わせて涼しい洋服も選んだのかもしれない。芝居の内容もドロドロとしたものでなく、さわやかな話なのではと想像させられる。